



初恋を知らない
ボクの初恋

著：サーシャ

Love or Friend

僕が君に抱いている感情は
いったい何なのだろう

考えれば考えるほど
迷路に迷い込んだように分からなくなっていく

友達としてのそれとも恋人としてのそれとも
違っていているような曖昧な感覚に堕ちる

君の優しさが心にしみる
君の言葉に癒される
君の存在に救われている

僕が泣いた日の夜も
君は泣き止むまでずっと慰めてくれた

君がくれる`好き`が世界で一番すき

だけど僕には分からない
この感情が恋愛対象としてなのか

君はもう恋はしないと決めていたから
僕なんかを本気にするはずないよね

でも昨日
君が呟いたこと聞こえていたんだ

答えられなくて嘘をついたけど
ちゃんと聞いていたんだよ

ねえ...あれはいったいどういう意味？

君の`好き`はどっちなの...？

告白

すき...

寂しいよ...

君の声を聞くと安心するけど
君の声を聞くと不安にもなる

"寂しいよ..."

なんて言ったら君を困らせるから
僕は押し込んで押し込んで

それでも言ってしまう僕は何なのだろうか
こんな感情に囚われて馬鹿みたいだ

"ごめん..."

こんな僕でごめん
寂しがりさんだったみたいだ

君の声が聞けるだけで幸せだよ
だから我慢するよ

"でも...寂しいんだよ..."

鳴らない返答

ひとりになった途端に
君が恋しくなる

僕は携帯電話を握りしめて
鳴りもしない着信音を待っている

バカみたいだろ...
いつもみたいに笑ってよ

君の声が聞けるなら
なんだって構わないから

もう待つのは疲れたんだ
君に触れていたい

次に会う時は
離さなくていいからずっとずっと抱きしめていて

僕がもう寂しくならないように
ダメかな...？

君のいない夜

君がいない夜はさみしい
君の声が聞けないただそれだけで

僕はどうかしてるんだ

君がくれた言葉をひとつひとつ思い出して
僕は君におぼれていく

目を閉じて

耳を塞いで

口を鎖して

心で君を感じる

夜は僕をさびしくさせるから
君がいない夜はきれい

僕はひとりがきれい

君がくれる言葉をひとつひとつ反響させて
僕は君におぼれていたんだ

僕が君の前で泣かない理由

僕には君にみせない姿がある
それは君が知らなくてもいいことだから

泣いたこと

涙を流したこと

ひとりで悩んだこと

全部全部君は知らなくてもいいんだ
全部全部僕が勝手に感じることに

だから君には絶対に言わないし言えない
僕が泣いたと分かったら君はまた謝るから

僕は謝ってほしいわけじゃないんだよ
僕は君を心配させたいんじゃないんだよ

そう思っているのに...
どうして僕はまた泣いてしまうんだろう

君の優しさに触れるたびに
止めどなく僕からわけの分からない感情が溢れだす

それを隠したくて
また強がりを吐いて君を困らせる

どうしてだろうね
ただ僕は泣いている姿を君に見せたくないだけなのに...

遠恋

あっという間に3か月が過ぎて
君とも普通に話せるようになってきた

だけど君と僕を隔てる距離という壁が
いつも邪魔をする

平然と笑っている彼らが恨めしいよ
空間と空間を切り取って君に会いたいの

もうすぐクリスマスがくるんからと
会う約束をしたけど

少し君の会うのが怖いよ
だけど何度も夢見たことだから

君と手をつなぎたくて
君になでてもらいたくて
君に抱きしめてもらいたくて

僕は勇気を振り絞っていくね
僕らを隔てる距離をぶち壊して

ちょっと物騒だったかな...?
そういうことも笑い話にして君と話もしたい

面と向かって目を見つめて
恥ずかしいからすぐにそらすだろうけど

君に会えるのが楽しみでしかたないよ

恋愛依存症

この寂しさはどこからくるの？

この切なさはどこからくるの？

君がいないから...？

君がいないから...？

目を閉じた真っ暗闇の中で

君だけが僕を見付けてくれるのに

伸ばした手は君に届かなくて

僕はまた底のない虚無に墮ちるんだ

寂しさをまぎらわせたくて

切なさをまぎらわせたくて

君がいないリアルから逃げ出したいよ...

君がいないリアルから逃げ出したいよ...

ねえ聞こえる...？

僕の声... 僕の心... 僕の想い...

嬉しいことも悲しいことも辛いことも

僕が感じた全てを君に知ってほしい

だけど君が居ないんだ...

渴れるほど涙を流したところで

君には絶対に伝わらないから

寂しいよ...

寂しいよ...

寂しいよ...

切なさで満たされたこの胸を

君の愛でもう一度いっぱいにして

君に愛されない僕なんて居なくていいから
君の為だけに愛される僕になってみせるから

"好き"って聞かせて...

ループマインド

君がいない時間はなんだか退屈だよ
君と一緒にいたくなる

魔法にでもかけられたように
僕は君のことばかり考えているよ

君にそんなことを言ったら
笑われてしまいそうだね

でも笑ってる君も好きだよ
ちょっと角度をつけた目線からはね

憎まれ口も冗談も皮肉も
君がどんな表情をするのか楽しみなんだ

ほらっ君のことばかり
こんな僕は嫌いですか...？

未送信メール

本当の気持ちを伝えたくて
頑張って頑張ってメールを打つけど

僕は絶対に送信ボタンを押せないんだ...

君に言ってしまったら困らせてしまいそうで
君に言ってしまったら嫌われてしまいそうで

君に送るはずだったメールを
真っ白の作成画面に戻ってクリアでおしこむ

頑張って頑張って伝えたかったのは
僕の弱さでしかないから見せられなくて

何でもないような返信を君に送る...

気づいてほしいとか
そんな気持ちはないけれど

君に知ってもらいたい...

君に送るメールは全部
僕の心の裏表でしかない嘘つきだということを

さっき送った一言も
本当はもっと一緒に居たいのに嘘をついた

〴〵おやすみ〴〵
なんて送りたいくなかったんだよ...

君に会ってしまったら

君に会ってしまったら

何もかもが終わってしまいそうで怖くなる

あんなに楽しみにしていたことなのに

どうしてか今になって不安が胸を締め付けるんだ

君に嫌われてしまいそうで...

君を嫌いになってしまいそうで...

どうしようもない臆病者なのに

いらない期待ばかり君に向けてしまっている

君に会ってしまったら

僕らの関係が終わってしまいそうで怖いよ

あと3時間と20分...

その答えを知るのだろう...

帰り道

不安も期待も疑心暗鬼のうちに
あっという間に1日が過ぎてしまった

君といた時間はたったの27時間
時間に換算してしまえば長いようだが実際は短い

体感時間は曖昧なもので
来た道を帰るだけの帰路がとてつもなく長い

君に会ってしまったから
君と離れてしまうのが耐えられなくて

時間が止まってしまえばいいとさえ思った
まだ君の手の感触が残っているんだ

前と同じに戻るだけなのにね

呆れてしまったよ
誰よりも自分自身に

こんな訳の解らない感情に支配されて
何よりも何よりも君と一緒に居たいみたいだ

帰り道の行く手を阻むフラッシュバック
君の優しさを隣に置いておきたいな

どうなりたいの？

僕はいったいどうなりたいんだろうか
君といるだけではだめなんだろうか

僕は君に何を求めているわけではないし
僕は君とどうなりたいとか思ってるわけでもない

君は僕とどうなりたいの？
僕はよく分からないや

僕はよく考えたことはないから
改めて聞かれると分からないって答えるしかない

君を失うことも
悲しい気持ちはあるけどきっとそれだけ

なんて君からしてみれば酷い話だよな

やっぱり僕は恋愛するにはむいてないみたいだ
君を巻き込んでしまって本当にごめん

もう少し...
僕の君に対する感情を整理するまで一緒にいて...

なんて我がままでごめん

少しだけ違う僕らの感情

君への思いを全部吐き出したら
僕のこの苦しさを緩和する事ができるのだろうか

君はちゃんと聞いてくれるし話してくれる
だけど僕はそれが簡単にはできない

僕の思いを表わす言葉が見つからない

君は僕にちゃんと気持ちを伝えてくれるのに
僕は僕の気持ちを半分も伝えきれていない

君には迷惑をかけてばかりだね
僕はどうしたらいいのかな？

君は僕の全部を受け止めてくれるといった
だけど僕にはそれでいいのかと自制心が働く

君は僕を好きだと言ってくれる
僕は君を好きでいたいと思ってる

少しだけ違うこの感情が恨めしい

君へ全部吐き出したら
僕らの関係は変わってってしまうのだろうか

魔法の言葉

僕が安心して寝れるように
君は魔法の言葉をくれる

僕は君の服の裾を握りしめて
君の胸に顔を埋める

ゝ 一緒にいるからね...ゝ

君の隣でケータイ電話が鳴ると
君が行ってしまいそうで寂しくなる

僕は君に抱きついて
必死に行かないでって見つめる

そんな僕の頭を撫でて
君はまた魔法の言葉をくれる

ゝ どこにも行かないよ...ゝ

君の温もりがほしくて
僕は何も言わずに手を握る

君が握り返してくれるって知ってるから
僕は魔法にかかったまま安心して寝れるんだよ

ゝ おやすみ...ゝ

夢の中の現実

今すぐに... 今すぐに...

なんて何度、無意味に君の名を呼んだだろう

声だけの優しさやメールだけの言葉が嫌なわけじゃない

ただ、君っていう実物に触れていたいと思う

君の事しか考えていないから

夢にまで君が出てきてしまう

君といれるのは嬉しいよ

だけどやっぱり、君には触れられない

歩けばすぐに届く距離だというのに

透明な分厚い壁が僕と君を隔てて嘲笑う

こんなに近くにいるのに...

君と僕は一緒いれないのだろうか

今すぐに... 今すぐに...

幾度となく君の名を呼んだとしても

君と僕はガラス越しに出会うことしかできない

そんな関係がうらめしい...

寂しがり弱虫

君に隠してきた弱さが
いつの間にか涙となって流れてしまった

君の前では決して泣かないと決めていたのに
言葉の代わりに涙が溢れてくるんだ

今まで何度も唇を噛みしめ
幾度も作り笑いを浮かべて
何でもないなんて誤魔化してきた

だけどそれが辛くて辛くて
それでも君には心配をかけたくなくて

ゝ 会いたいゝ なんて言えない
ゝ 今すぐゝ なんて無理だから
ゝ 抱きしめてゝ すら叶わない

泣いたら君を困らせてしまう
僕はワガママになってしまった

こんなことなら会わない方がよかった...
君を好きにならなければよかったのに...

どんなに優しい言葉でも
君が隣に居ないから僕の胸を締め付けるんだ

泣いてしまっでごめんなさい
こんなに弱い僕でごめんなさい

それでも君と一緒に居たいと夢みてしまうんです...
本当にどうしようもない寂しがり弱虫でごめんなさい...

すぎるじかん

君と一緒に過ごす時間は
君と会うまでの時間とは比べ物にならないくらい早い

君とまた会えたのはたったの1日
君に会えないのは1カ月単位

君といるといつもの5倍も速く時間が過ぎる
君といるといつも時間が止まればいいと思う

どうしてだろうね...
同じ時間のはずなのに...

素直じゃない僕

君の前で泣かないって決めてから
もうずいぶん時間が立ったような気がするよ

君は泣いてもいいって言ってくれるけど
僕はやっぱり君の前では泣けないよ

素直になって何でも言ってほしいなんて
そんなの言えっこないのにね

素直な僕が好きだと
素直な僕だから好きになったと

君がどれだけ優しいかも分かってるから
君に心配も迷惑も涙も絶対絶対させたくない

素直じゃなくてごめん
伝えたい本当の気持ちも言えないよ

だって全部 僕のがままだから

君を傷つけてごめん
そんなつもりなんてないのに

本当に...こんな僕でごめん

僕は何もしてあげられていない

僕は何にもしてあげられていない
君に貰うばかりで情けないよ

君の優しさにすがって
君の好きに甘えてばかりで
君の腕に抱かれているだけ

僕は君に何にもしてない
僕は君に何にもあげてない

君の言葉に満たされるだけで
君には何一つ見返りをあげてない

ゝ 大好きゝ も

ゝ 愛してるゝ も

君から貰うばかり
僕は恥ずかしくて言えないから

僕はズルいね
ごめん

僕は君に何をあげられるのかな...?

わからないけど一つだけ確かなことは
君が笑ってくれるだけで嬉しい

何もできないけど
君が笑ってくれるように隣に居させてください

I don't No.

君が僕と同じことを思っていたなんて
正直すごく驚いたよ

思えば、僕らはあまり
感情的な面で話をしたことが少ない

言わなければ伝わらないのに
ふたりして傷付けたくなからって溜め込んでる

君と僕は似ているのかな...?

だけど
どうしたら君が喜んでくれるか分からないんだ

ごめん...
半年も見てきたつもりなのに...

僕はなにひとつ分からないんだ

君がくれることに
それ相応のことで君にかえしたい

こんな僕を好きになってくれた

君のために...

泣き笑い

ありがとう...

こんな僕を好きになってくれて...

本当にありがとう...

壊愛

君に愛されない僕は...

いったいどうやって生きていけばいいのだろう...

君に愛されない僕に...

存在する意味があるのだろうか...

「僕ら」と「僕」

これで終わってしまうのだろうか

「僕ら」は「僕」にならなければいけないのだろうか

僕には耐えられない...

胸を引き千切られる激痛に襲われる...

居てくれなきゃ嫌だ それはわがままで

離れたくないよ それは傲慢で

特別でいたいんだ それは無意味で

泣いても泣いても好きでいたんだ

泣いても泣いても好きだったんだ

それが価値観で終るなら

僕はもう泣く事もできなくなる

「僕ら」が「僕」になる

この上なく悲しくて狂おしいのは

君が僕を惚れさせたからなのに

もう何もかも届かないのかな...

ここでお終い...ここでお別れしないといけないの...?

たまらなく君のことが好き

君の事 ちゃんと考えてなかった
自分の事もわからないのに わかってほしいとか

そんな子供じみた考えだったんだ
そんな我が儘な感情でいたんだ

君と離れてようやく理解したって
もう遅い...何もかもが遅すぎた...

好きだ なんてもう届かない
泣いても泣いても泣いても泣いても泣いても
意味がなくて心が痛たって叫んでいる

独りの孤独が久しぶりで
君の影が散らついてばかりいる

気づけばまた君の事考えて
気づけばまた君の事好きだって実感してる

もう一度 君に好きって言ってほしい

自分勝手にどうしようもないけど
君の事が好きで好きでたまらなくて死にたくなる

それくらい...

愛してたんだ...

何もかもが足りない心

何もかもがこの胸には足りない
風通しのよい隙間だらけこの心

補う為に必要な何もかもがない
もうそれを手にする事すらまま成らない

記憶の海で塩素を吸いすぎた胸は
傷に染み渡るその激痛に耐える事もできない

何もかもが足りない
何もかもが足りない
何もかもが足りない

世界はそれでも時間を刻み
暁を待ちわびているけれど

この心は欲する全てが手にはいかない

何もかもがこの胸には足りない
何もかもがこの心には足りない

無機物のガラクタを詰め込んだとしても
角が突き刺さり押し付けられ拒否反応を起こし死に急ぐ

絶叫

痛みも苦しみも辛さも悲しみも寂しさも...

時間が緩和してくれるなら...

どれだけ救われるだろうか...

副作用

吐き気も頭痛も自殺願望も

全て副作用だというのなら

それすらも愛そう

そしてまた繰り返そう

そうでもしなければおかしくなりそうだ

Short Love Letter

愛されていた時間が懐かしい
ほんの少し前なはずが底は果てにまで見えない

愛し愛され見つめ合うことが
どこか遠くで蜃気楼のように見える

僕はもうそれを思い出すしかできない
"愛していた"それだけで思い出が抉られる

甘い誘惑に溺れたくて
その中で死んでしまいたくる

愛している

もう一度愛されたい

それは僕だけでは完成する事はなく
僕が想う貴方が居てはじめて完成する

あの時間へ戻るために
ラブレターでも時代遅れな事をしてみようか

原始的ではあるけれど
それで僕の愛がうまく伝わるのなら

僕はそれが何よりも何よりも嬉しい

笑って前へ進むために

君を好きになって
君に好きになってもらえて

僕は心の底から嬉しかった

僕は心の底から笑っていられた

こんな僕に恋を教えてくれて
こんな僕に恋をさせてくれて

"ありがとう..."

"それから、さようなら..."